

中外日誌

臨黄

妙心寺派

禅と基督教の対話

東京禅センターは3月31日、東京都世田谷区の龍雲寺本堂で講演会「禅とキリスト教の出会い」を開いた。禅僧の立場から安永祖堂花園大学教授(天龍寺国際禅堂師家)、キリスト教徒の立場から新約聖書学者の佐藤研立(新約聖書学)が講演。両氏の対談Ⅱ写真Ⅱも行われ約60人が耳を傾けた。

昭和54(1979)年に始まったヨーロッパのカトリック修道院と日本の僧堂の「東西霊性交流」に2回目から現在まで関わる安永教授は「禅の世界だけでは見えない部分をキリスト教の方々と交流を通じて学ばせていただいた」と述べ、臨済禅の道場で修行者は切磋琢磨するライバルであるのに対し、カトリックでは信仰は個人の問題で他と比べることは意味をなさない、などの違いを挙げた。

またカルメル会の奥村一郎神父からキリスト教神秘主義の「魂の(暗夜)や「射(短)聖句を唱える祈り」について、新約聖書学者の八木誠一氏から体験の言語化について学んだことも語った。

『禅キリスト教の誕生』などの著書がある佐藤教授は、スイス留学中

の1982年、愛宮ラサー・エックハルトと禅師の接心に参加した上で、「キリスト教神秘主義は坐禅のような誰にでも実践できる方法がなかったのが弱み。そこは禅の方は大きなプライドを持っている」と指摘した。「若い人に伝統的な禅宗は魅力が失っているのでは」との思いを話した。

同教授は、キリスト教徒の神やイエス・キリストの理解の仕方が、禅を通じて「釈尊と自己の本質は同じとする(仏教徒の)見方」に似てくる、一般の若い人でも座ると指摘。「禅は人間に与えられた豊かな可能性を引き出し事実にならざる」と提言した。



「らしめる道」と述べ、坐禅体験により与えられた視野でキリスト教を脱構築・再構築することは意味がある、と強調した。

対談で安永教授は「禅的な経験と同じようなものがキリスト教にもあるのでは」と質問。佐藤教授は中世ドイツの神秘主義者マイスタ